

分科会 2 - 1 テーマ「人材育成について」

パネリスト

屋久島地区：屋久島環境文化財団 日高健

白神地区：秋田県藤里町 櫻田博、青森県西目屋村 西澤一司

コメンテーター：NPO法人ホールアース研究所 代表理事 広瀬敏通

コーディネーター：NPO法人日本エコツーリズム協会 理事 海津ゆりえ

海津

- ・ 急遽、発表予定であった南紀・熊野地区の橋川氏は分科会テーマ 推進組織や地域コーディネーターへ移ったため、発表は2地区からのみの報告となる。

広瀬

- ・ 報告だけでなく、フロアにいる人もぜひ参加して人材育成について考えよう。
- ・ 今回は結論を導くものではなく、同じテーマで議論をして、ステップアップをし、充実お互いに充実させていこうというもの。

日高：

- ・ 屋久島は年間入島者が約 30 万人で、林業・登山の島から観光の島へと移り変わった。現在エコツーリズムの提唱がなされ、マスツーリズムからの脱却と、持続可能な資源を目指し、それを屋久島方式で進めている。
- ・ 屋久島では、ガイドは以前から林業従事者や登山・採取の案内人として存在していた。1990 年頃から民間のエコツアー事業者が設立され、自然ガイドツアーを行うようになった。現在は 70 社約 130 人がガイドとして活動を行っている。この分野では 2 億円売り上げがあり、4 億円の経済波及効果があるといわれている。
- ・ 課題としては、誰でもできることでレベル、スキルの格差があることで、10 年以上やってきて 13000 円が 1 日ガイドの相場になっているが、10 万円という対価でガイドを行う人もいる。また、当該出身者が 7 ~ 8 割を占め、島への帰属意識が薄いということ、お互いの交流が少ないことなどが課題としてあげられる。
- ・ 屋久島文化文化財団で「屋久島ガイドセミナー」を開催するまでの道のりは、まず観光協会、ベテランガイド、6 つあるガイド団体、エコツーリズム支援会議へのヒアリングなどを 1 年間かけて行った。まさに高い理想と地道な内容で作り上げ、エコツーリズムの理解、地元への理解、最高の講師陣などをそろえることができた。
- ・ 企画状の留意点としては、押し付けでない協働の企画であること（ボトムアップ総意で作っていく）で、内容はガイドの要望を取り入れたものとした。また、ガイド間の交流を行うことを組み入れ、屋久島で生きるガイドとしてという視点を大事にした。
- ・ 実施内容は、「他地域のエコツーリズムの実際」として小笠原の例と比較し、井の中の蛙からの脱却を図った。「エコツーリズムの理念」では、エコツーリズムマニュアルを使って、ツアーの価値について学んだ。「ガイドのモラルとマナー」では、知床財団の

松田氏が、ただのり論や海外を視野に入れたガイドを目指そうといった話しを行った。一般の人にも開放した「講演会」を行った。その狙いはエコツーリズムの普及・啓発であった。「ガイドの法律問題」では弁護士が判例にもとづいた話し、「国立公園の利用」は実際のレンジャーが期待するところの話しを行った。情報交換会は参加義務として、ガイド交流同士の交流の場となった。話せばわかる、ではないが非常に意味のあるものであった。知床のガイドとの交流なども行き、今後国内ガイドの交流の場になれば良いと考えている。「インタープリテーション」はピッキオを呼んで行った。「屋久島のガイドとして考える」は、最終日の午前中にプロジェクトXにもでた観光協会長から行った。厳しいことをしっかりいってもらったので、これが実際一番ひびいたようだ。

- ・ 2年3回で70名の受講があった。その成果としては、ガイド自身のガイドディングを見直すきっかけになり、世界に誇れるガイドとしての向上心や相互理解を図ることができた。
- ・ 今後の課題としては、未受講のガイドへの働きかけや、レベルアップセミナーの開催認定登録制度との連携、相互不信の解消があげられる。
- ・ 展望としては、ガイドの相互交流や研鑽の場となり、全国ガイドミーティングの企画を行いたい、旅館を集めた講習や屋久島で取り組むエコツアーの実践へとつなげたい。ガイド付きツアーに参加したいと思ってもらえるように、この動きを全国へ波及させたいと考えている。

海津：では白神地区の発表をお願いします。

櫻田：

- ・ 白神地区は2つの県がからんでおり、今回は県行政をこえてとりくんでいる。両町村の共通点としては、田舎であること、国道がないこと、鉄道が走っていないことなどである。現在までに、商工会やスポーツで交流を行ってきている。
- ・ 町でガイドの育成を行うことになった背景はいくつかある。利用者の急増に対応できるガイド数が不足していたため、緊急でガイドの育成が求められていた。岳岱自然観察教育林というブナが残る地域で踏圧による根の露出が顕在化してきたので、1周1時間で回れる遊歩道を設置したが、ブナの根が岩からでて倒れるようなこともおきるようになり、人数制限などの利用に関する規制の議論がおこった。観光物産協会だけでなく宿泊施設である観光公社でもガイドの斡旋を行ったため、予約がだぶるなどの問題が発生し、案内人斡旋の一元化の必要性があった。ガイドが18名いたが、話すことがまちまちでクレームも発生するようになり、最低限伝えるべきものの共通性が望まれていた。
- ・ 事業実施段階でまず問題になったのが、予算と事業主体であった。ちょうど緊急雇用事業が始まり財団法人である観光物産協会が委託金をうけてはじめることになった。
- ・ 研修は、ガイド育成の期間は、1年では到底無理なので2年に渡っての研修とした。参加募集地域の範囲は、藤里町だけでは人口が少ないため、能代山本地域まで対象を広げ

て行った。また、講師は地元の学識経験者や森林センターの長などを中心に選任した。研修内容は、基礎的な学習を行えるようにし、自然の知識だけでなく、文化との関わり、町内観光施設、登山時のペース配分などや、遺産登録の経緯や遺産地域についての理解など、最低限の説明ができるところまでを設定した。

- ・ 受講の状況は、申し込み 22 名で内藤里町在住者は 7 名であった。また職業別にみると自営業 4 名、会社員 11 名、無職 7 名で、ガイド専業で今回受講するという人はいなかった。1 年目は、6 月に開校し 11 月に閉校するまで合計 11 回の研修を行い、内 8 回がフィールドでの研修だった。そこで 17 名が残り、2 年目は合計 10 回、フィールドで 8 回、室内で 2 回の研修を行ったのち、筆記試験と実技試験を行い、修了式となった。
- ・ 有料ガイド認定要項を定めて、講師 4 名を A 級、合格したガイド 10 人を C 級としての名称で登録し、活動を行っている。
- ・ 現在、年に一度の研修会を行っているが、同僚ガイドのコピーをするだけのガイドもあり、相違工夫が不足するなど、ガイド自身の資質向上に向けた取り組み不足が問題となっている。大きな団体で入ると、腐葉土に影響を与える為、マイクなし、一度に入る数を 15 名程度としているので、兼業ガイドが中心の中、ガイドの絶対数が不足している状況でもある。また、冬が長く、ガイドだけでは難しい場所がら、若手の担い手がおらずガイドが高齢化していることも大きな問題である。ガイド制度をはじめたが、更新や新規登録作業をどうするかなども決まっておらず、財源の問題もあり続けていくことが非常に難しい状況にある。
- ・ このままではだめだ、というのは関係者の共通理解である。今後は、まずガイド間で交流を行い、この地域にどういったガイドが必要なのか、ガイドを統括する組織をどうしていくのか、ガイドとして生活していける環境づくりを地域としてどう取り組んでいくのか、自然ガイドだけでなく、暮らしを解説できる里山のガイドも必要ではないのか、などを話しあって方向性を決めていこうといった段階である。
- ・ 利用者の増加による自然環境への影響は拡大しており、地元としてはとにかく急がなければならない。白神ガイドは、白神山地への還元として、ガイド料を積み立てて歩道の補修などの整備を行い環境保全に役立てている。

西澤（西目屋村）

- ・ 青森県で白神山地の市町村は 4 町村あるが、西目屋村に観光客の入込みが集中している。現在エージェントからのガイド手配が 95% を占めている。西目屋観光ガイド会を 5 名ではじめたが、現在はガイド予約を一元化、1 日で 40 名用意する日もある。とても村だけでは回らないので、最近は県が組織した解説協議会に会員である 18 団体の応援をもらってまわしている。そこには自然保護団体も入っており、ガイド組織をいかにまとめるかが当面の課題である。

広瀬：

- ・ 両地区は、皆さんがイメージするエコツアーが実際とりくまれている場所である。ガイドという点では屋久島はまさに人数も多く今の取り組みがモデルであるであろうし、白神は発展途上ということになるだろう。違いをそれぞれみていくと興味深く、それぞれ課題もあげてもらった。

海津：

- ・ さて、ガイドはお山の大將が多いので、養成の受け入れ難しいのではないかと。屋久島では登録認定制度の検討も進んでいるようだがこれはうまくいっているのか。

日高：

- ・ 登録の要件として受講を原則とするとしている。実は登録か認定か、どうするのかで問題がおこっている。底辺をそろえることが基本であるが、事業としてガイド養成を行っている会社もあれば、社内に資格制度をもっている会社も2・3社ある。自主研究グループで検討を行っていたが、支援機関を通じて現在検討を行っているところである。講習をうけて底辺をそろえるといったことが基本と考えている。

海津：

- ・ 地元の皆さんは何を求めているのか？

日高：

- ・ とんりの人は何をしているかわからない、といった状況である。昔から大事にしてきた森で、地元には「山の神の日」があるが、例えばその日は入っていいのか、といったことから意思の統一を図っていく必要がある。なかなかお互いテレやでガイドがいても話しをしようとしなない。

海津：ガイド間の技術だけではないということか。

日高：ガイドと地元の人との軋轢もある。

海津：

- ・ 白神ではガイドの高齢化とあるが、もともとマタギや林業との問題などはどうか。

櫻田：

- ・ ガイドはとりあえず数的には間に合っている。ガイドをつけて見てもらった方が付加価値あがった。問題はガイドの高齢化の問題で、年間通じた仕事となるよう考えていきたいと考えている。今は仕事にならないから若い人に敬遠されている。

海津：西目屋村ではどうか。またぎのエコツアーもあるが。

西澤：

- ・ 食えている人は1名だけである。村では観光ガイド会というガイド組織があり、自然解説8コースを案内している。県が昨年白神山地解説協議会という18団体集めた会をたちあげた。お山の大勝が多いが、この団体をまとめてなんとかやりたいと思っている。最低限のルールを作り、それを守るような活動を行えるようにもっていきたい。

田中（知床財団）：

- ・ 知床も 50 名ガイドがあり、ガイド協議会があるが、残念ながら分裂状態でありうまくいっているとはいえない状況である。屋久島でのガイド登録認定制度で、登録のメリットは何であるのか。また、現在検討はどんな状況であるのか教えて欲しい。

日高：

- ・ レベルをそろえることで、屋久島ブランドの格をあげること。メリットとしてはガイド総覧などを作って広く紹介していくことである。「リアルウェブ」という屋久島のエコツアー情報発信サイトがある。そこに優先的にお願いできるとか。要件としては、セミナーをうけるということにし、ガイドの横の連携を図っていけるものにしたい。現在は残念ながらセミナーにでているのは半分である。お山の優勝が多いようだ。しかし第 1 世代ではなく、肝心なのは第 2 世代で、ぜひ育てたいと考えている。時間が物事を解決するということもある。

広瀬：

- ・ エコツーリズムがはじめて正式に取り上げられた初めての法律があり、それが沖縄の保全利用協定である。ガイド全体のレベルあげる目的で作られた。西表島が第 1 号で、やんばるが第 2 号としてもうすぐはじまる。座間味が第 3 号の予定だ。ガイド自身で作る自主ルールを、地元や行政が認めるというもので、ぜひ全国に広げていきたい。養成や登録制度だけではない。

質問 2

森田（滋賀高島市）：

- ・ 屋久島ではガイド料はすべてガイドの手元に入るのか。自然保護に役立っているのか。

日高：

- ・ ガイド料はすべてガイドの手元に入り、ガイド料が資金プールされるシステムはない。林野庁で行っている「屋久島山岳協議会」で、入山協力金ができつつあり、トイレを作るなどにまわる。

広瀬：

- ・ 利用保全協定で環境負担金が既に 500 万円積みあがっている。1 社から全体へ、そして地元へ還元し、それによってまた地元から受け入れてもらう。地域には様々な対立軸がある。

海津：会場に多くのガイドさんがきている。他の地域の事例として、この場で自分の活動や地域のことなど発言して欲しい。

近藤（富士山登山学校ごうりき）

- ・ 富士でもガイド間で交流をし、ガイド団体がうまれネットワーク化が進みだしている。つながり進むことによって、富士山ブランドを高くしていきたい。自分は富士山自然体

験活動協議会 F - C O N E の活動に関わり、地域意識の向上やネットワーク化にとりくんでいる。

楠部（軽井沢ピッキオ）

- ・ 熊のガイドなどやっている。ピッキオでは、現在研修生として6ヶ月の養成を行っている。様々な地域で行われている養成の様子を聞くと全体に短いものが多いようだが、時間をじっくりかけ、継続的に行っていくことが大事である考える。お客様はガイドについている。

広瀬：

- ・ 現在人材を養成に関しては、筑波大学との連携が始まっている。大学卒業した人が、プロガイドとしてすぐ働きたいという動きがある。大学院がでたところで2泊3日じゃおかしいのではないか、それをはじめからきっちりと大学で教えるというもの。

海津：その点では藤里では2年間かけて研修を行うということだが。

櫻田：

- ・ 最低2年必要と考える。町外の人ならもっと必要ではないか。

山田（スイス）

- ・ スイスのスキー教師の場合、すべてお客様満足度が大事で、安心、安全、感動、サービス、楽しい、納得がキーワードと考える。ガイドは次にリピートさせることが大事である。スイスでも場所をかえるとすぐデビューできないので、オフシーズンは、看板つけかえや花の入れ替えなどを地域が新人ガイドへ斡旋している。ヨーロッパのガイドの年収は、一般平均年収の1割～2割高いといわれており、利益がだせる職業である。若い人はそうでなければ育たないのでは。

広瀬：

- ・ ガイドの社会的評価を高めていく必要があると考える。ガイドの職業が確立している国も多い。ガイドの地位を確立することが、エコツーリズムに関わっている人の責任であると感じている。

櫻田；

- ・ ガイド養成難しいと考えている。しかし、ぜひ統一した形で進め、レベルアップを目指していきたい。

日高：

- ・ 屋久島の人口増えている。エコツーリズム推進はプラスなのである。みんなで幸せになりましょう！